



TITLE:

アメリカ大学図書館の旅(1) - ハー
バード大学 -

AUTHOR(S):

後藤, 慶太

CITATION:

後藤, 慶太. アメリカ大学図書館の旅(1) - ハーバード大学 -. 静脩 2000,
37(2): 12-15

ISSUE DATE:

2000-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37587>

RIGHT:

育)を象徴としてデザインしたものといわれている。

湯浅自身の芸術愛好の傾向と、当時の京都に良い美術館が無かったこともあって、明治45年4月の2週間、府立図書館の3階陳列室を中心にして「白樺美術展」が開催された。主として西洋画の複製や版画を展示したものであったが、有島武郎は『白樺』の明治45年5月号に、湯浅が非常な好意をもって協力してくれたことを感謝する旨、明記している。『白樺』創刊者の一人、志賀直哉も彼の『京都通信』の中で、湯浅を始めとする館員の熱心な協力を、筆を究めて褒めている。

大正元年には正統派を自認する画家達から俗流として蔑視されていた竹久夢二の個展を図書館で開催して、同じ時期に向かいの公会堂で開かれていた文展よりも多くの観覧者を集めたという逸話が残っている。(この個展は湯浅が辞任した後の大正7年にも第2回を同館で開催している。)

大正5年、湯浅は大森知事の退任と同時に図書館長を辞任するが、同年5月5日、彼の内外の図書館事情に精通した経歴を生かすべく、早稲田大学から図書館顧問に招聘され、市島謙吉館長、毛利宮彦司書などと共に同図書館の新館建築の設計に当たったのであった。しかし、大正

7年12月に新大学令が公布されたために、計画に食い違いが生じ、計画自体が停止されてしまった。その後、坪内逍遙、市島謙吉(春城)など早稲田大学首脳の依頼を受けて、俳優図書館(別名:演劇図書館)設立準備に奔走する傍ら、海洋図書館の計画にも参画して、その調査のために三度目の渡米を果たしたのであるが、大正12年9月の関東大震災により、これらすべてが画餅に終わってしまった。この挫折の連続は湯浅の氣力を相当衰えさせたに違いない。以後、経済的にも不遇が続き、東京、大阪、また東京と、兄治郎の家や、未亡人になっていた次女の家に移住する生活が続いた。晩年の10年間は専ら旧約聖書の正文の訳出に励む一方、『箴言』『ヨブ記』『詩篇』『伝道之書・雅歌』『第二イザヤ』『イザヤ書』と次々に出版し続けた。昭和13年2月4日、東京中野区上高田の自宅の2階から階段を踏み外して転落したことが基で86才の図書館とヘブライ学に捧げた生涯を終わったのである。

中川正己筆『明治の文化人湯浅半月1～3』(『京都府立総合資料館だより』No.117～No.119:1998年10月～1999年4月)を参考にさせていただいた。(ひろにわ もとすけ:元附属図書館職員 現花園大学助教授)

アメリカ大学図書館の旅 ハーバード大学

附属図書館情報サービス課参考調査掛 後藤慶太

1. はじめに

私は、2000年2月27日から2週間、「平成12年度京都大学後援会助成金第1類第1種(海外派遣)」を得て、アメリカの大学図書館に研修に行く機会を与えられました。また、研修期間の後半では、日本語資料を担当している北米のライブラリアン達の研究会議に参加し、本学電子図書館について発表するという機会にも恵まれました。本稿では、最初に訪問したハーバード大学についてご紹介します。

2. ハーバード大学

<http://www.harvard.edu/>

マサチューセッツ湾大植民地圏最上級役員会の票決により1636年に新しく設立された大学は、初代の寄贈者であるJohn Harvardに因んでハーバード大学と命名されました。1638年に没したHarvardは、自分の図書室と財産の半分をこの新しい大学に残しました。以来、350年以上の歴史と伝統を誇るこの大学は、90以上の図書館を持ち、1,300万冊にのぼる膨大な資料を所蔵しています。(Harvardが寄贈した図書は1冊を残してすべて火事で焼けてしまったそうです。残りの1冊とは、ある学生がこっそり持ち出していた本でした。学生はその本をカレッジの学長に差し出しました。学長は、厚くお礼

を述べた後、許可なく本を持ち出した罪により学生を退学させたという伝説があるそうです。)ハーバード大学ではイェンチン図書館の日本語資料担当のライブラリアン、マクヴェイ山田久仁子さんに全面的にお世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。



ハーバード大学キャンパス

イェンチン図書館

<http://hcl.harvard.edu/harvard-yenching/>
東アジアコレクションでは全米屈指の図書館です。およそ100万冊の蔵書のうち日本語資料は25万冊ほどで、全米で3本の指に入るそうです。しかし、中国語資料はその倍の50万冊を越えており、貴重書についても、中国人キュレーターの活躍により漢籍が充実しているということで、東アジアとは言え、中国書が主要な部分を占めています。このことは訪問した他の図書館などを見ても言えることと思います。貴重書は未整理のものも多く、その中から元代の拓本が発見されたり、夏目漱石が英文で書き込んだ本が見つかったりと、今後、整理が進むのが楽しみです。

分類は、1997年まではイェンチン分類という独自（とは言っても、他大学の東アジア図書館等でも使われています）の分類法が取られていましたが、現在は米国議会図書館の分類（LCC）によっています。山田さんは、NACSIS Webcat (<http://webcat.nacsis.ac.jp/>) が公開されたことを高く評価され、国立国会図書館が目録を公開してくれることを望みます、とおっしゃっておられました。（この話を聞いていたわけではないでしょうけど、国会図書館の目録はほどなく公開されるようになりました。

<http://webopac2.ndl.go.jp/>)

Social Sciences Program

<http://data.fas.harvard.edu/ssp/>

ここは、環境に関する資料、政府刊行物、地図、マイクロフィルムなどを収集している図書館で、次にご紹介するラモント図書館と同じ建物内にあります。政府刊行物についてはその保存図書館という機能を果たしており、それらを必要とするすべての人に対して公開された図書館なのです。ここでは、レファレンス部門の長であるAmy Kautzmanさんにご説明いただきました。

さすがにマイクロフィルムを扱う館だけに何十台というマイクロリーダーが設置してあり壮観な眺めでした。リーダーの調子について伺ったところ、最新の物を除き故障がちで、毎朝のように「ベッタン、ベッタン」している（故障中のはり紙をしている）そうです。何処も同じと苦笑してしまいました。それから1冊の本を見せていただきました。それは1790年の国勢調査でした。ところが昨年分の国勢調査は一つの壁面が埋まるほどの量で、この国の発展ぶりがこのような側面からも窺えるのでした。

マイクロフィルムの所在を調べるにはカード目録を利用していましたが、最近はCD-ROMに切り替わっています。現物にたどり着くにはまずCD-ROMを検索するということです。CD-ROMは3万枚あるということですが、この枚数は検索性のもの以外に、市販品のCD-ROMなども含まれるのでしょうか。また一部のソフトウェアのためにWindows3.1のような旧システム用端末も維持しているということです。



ラモント図書館

ラモント図書館

<http://www.fas.harvard.edu/lamont/>
1999年に開館50周年を迎えた全米最古の学部学生用図書館です。ラモント図書館の開館により、学部学生用図書館というものが全米の各大

学に拡がっていったということです。先般の不況下で多くの大学が学部学生用図書館を閉鎖しましたが、ハーバード大学はこれを維持しました。ここでは、主に利用者教育を中心として館長のHeather Coleさんにご説明いただきました。

ハーバード大学の図書館のシステムはHOLLIS (Harvard OnLine Library Information System) と言います。ハーバードの学生にとってはHOLLISを使いこなすことが肝要で、そのインストラクションをこの図書館で担当しています。インストラクションは、そのための専用の部屋が設けられており、2名のスタッフが12名の受講者に対して行います。今後は受講者を14、5名まで増やしたいということです。また、受講者は学生だけでなくHOLLISに不慣れな図書館員やあらためて勉強したい図書館員もいるそうです。

図書館員が授業をするということはありませんが、と伺ったところ、やっていないというお答えでした。それから、図書館に対して、授業に関連した教員からのリクエストはいろいろあるが、すべてに応えるのはとても無理だというお話もされました。

レファレンスコーナーでは、学生が入れ替わり立ち替わりスタッフに何事か質問していました。端末を見たところ、デスクトップからいっさいのアイコンが消されていて、Netscape以外は使えないようになっていました。WindowsNTによって運用されているようでした。mailをしたい人はロビーの端末を使いなさい、という掲示がしてあったので覗いてみると、グリーンのiMacが4台置いてあり、やはり御多分に洩れず大盛況でした。また、検索結果をプリントアウトしている学生がいましたが、自分のIDカードをプリンターに差し込んで使っていました。料金は口座引落にでもなっているのでしょうか。日常、図書館端末に対するいたずらや無駄なプリントの山に心を痛めている私としては、非常に考えさせられる光景でした。また、リザーブコレクションというものを初めて見ました。サーキュレーションデスクの後ろにはそれ用の立派な本棚がいくつもあって、たくさんの資料が収められていました。普通、日

本では指定図書などと呼ばれ、授業に関連のある必読資料を図書館が複数部数用意して学生に貸し出します。私が卒業した大学にも、現在の職場にも指定図書はないので、これほど大規模なものとは想像していませんでした。

この建物の最上階は、フロア全部が衛星放送、ビデオやオーディオの視聴、インターネットが楽しめるオープンルームのようになっていて、多くの学生で賑わっていました。一角には、語学研修のための部屋もあり、教員が予約をして使えるようになっていました。もっとも予約と言っても用紙が扉に貼り付けてあるだけで、要は早い者勝ちということのようです。

最初に述べたように、ラモント図書館は学部学生専用の図書館です。次にご紹介するワイドナー図書館のような研究図書館とは明らかに違うリラックスした雰囲気があります。その大きな理由は、おしゃべりが許されているからでしょう。学生達は、自由に議論したり談笑したりしていました。しかしそれは大声でなく、騒ぐということもなく、抑制の効いたものであると私には感じられました。何よりも携帯電話でしゃべっている学生を見ることはありませんでした。(滞米中、公共の場で携帯電話の雑音にいらさせられることはありませんでした。喫煙についても、また観劇中の会話等についても然りです。公共のマナー、エチケットに対する日本人の感覚はいかにも幼稚だと思わざるを得ません。)



ワイドナー図書館

ワイドナー図書館

<http://hcl.harvard.edu/widener/>

世界最大の人文・社会科学分野の研究図書館の一つ(蔵書数約320万冊)で、1915年に開館しました。正式には、“The Harry Elkins

Widener Memorial Library” と言うようです。ハーバード大学を1907年に卒業したWidenerは、1912年、豪華客船タイタニックとともに短い生涯を閉じました。母のEleanorは、息子の意を酌んでこの図書館を寄付しました。館内には、Widener が使っていた書斎がそのままの形で維持されています。現在、大がかりな修築・修繕が行われていて、利用できないエリアがたくさんありました。彼の書斎も整理が始まっていて、残念ながら部屋の中に入って見ることはできませんでした。

この図書館の外観は、古代ギリシアの神殿のような巨大な柱が何本も立ち並ぶ壮麗な造りが特徴です。建物の中に一歩足を踏み入れると、あたかも20世紀初頭にタイムスリップしてしまっ

たかのような錯覚に陥ります。レファレンスルームを少しだけ歩きましたが、しわぶき一つ聞こえない厳粛な空間がそこにはありました。

立ち去り際に、入口の扉に貼ってある紙に目が止まりました。それには、「研究図書館の責任として、教官、学生、研究者の研究環境を守るため一般の方の見学はお断りします」という内容のことが数ヶ国語に訳されて書いてありました。館内の撮影も禁止されています。図書館という「場」がいかに大切であるか、そして、誰のために何のためにその場を守らなければいけないのか、この当たり前の、しかし当たり前すぎるゆえに見失いがちのことに、遠い異国であらためて気づかされる思いで、その文章を何度も読み返しました。

(ごとう けいた)

附属図書館資料紹介

「植物学・園芸学：文献・標本コレクション」 平成11年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）

平成11年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）として、「植物学・園芸学：文献・標本コレクションBotanical and horticultural collection. pt.1: Plant taxonomic literature collection」が附属図書館で購入されました。このコレクションには植物分類学に関する4,679点の基本参考文献が納められています。植物分類学者にとって重要でありながら入手困難で、日本の図書館にはどこも所蔵されておら

ず、植物分類学の研究を進める上で大きな支障をきたしていました。

文献は、大英博物館自然史部（British Museum, Natural History）の蔵書をもとにマイクロフィッシュ化されています。本コレクションが購入されたことにより、本学及び全国の植物学、園芸学の関連分野の研究者にとって学術・研究上の利便性が高まり、研究も飛躍的發展が見込まれます。

CD-ROM版PCI（欧米雑誌記事索引）

PCI (Periodicals Contents Index)CD-ROMが附属図書館で購入され、4月から利用に供しています。PCIは19世紀から1990年までの主要な人文・社会系雑誌3500誌の目次を網羅する唯一の欧米雑誌記事索引データベースです。今回、一挙にSeries IとIIすべてが購入されました。この中には、京都大学が所蔵していて歴史的に著名な雑誌、引用されることの非常に多い雑誌、英語圏以外で刊行され主要な索引誌に登場する

雑誌等が収録されています。

京都大学にとって、膨大な量を誇る、人文・社会科学系の各図書室が所蔵している雑誌の有意義な活用のための貴重なツールとなります。なお、PCIは電子図書館「学内向けサービス」のページからご利用になれます。

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/lusr/gakunai.html#cdrom>